

リオデジャネイロオリンピックの閉会式に行ってきましたので、その一端をここでご報告致します。

東京は2016年大会に立候補し、リオデジャネイロとの招致レースで敗れました。東京都庁舎でIOC総会に合わせて中継イベントも行われたわけですが、あの時にリオ開催は初の南米開催だとメディアが伝えていた事も鮮明に覚えています。

なぜ、こういう事を書いているのかというと、リオに到着した日、最初に向かったテコンドー会場で「初の南米開催」の熱気を全身で感じたからです。

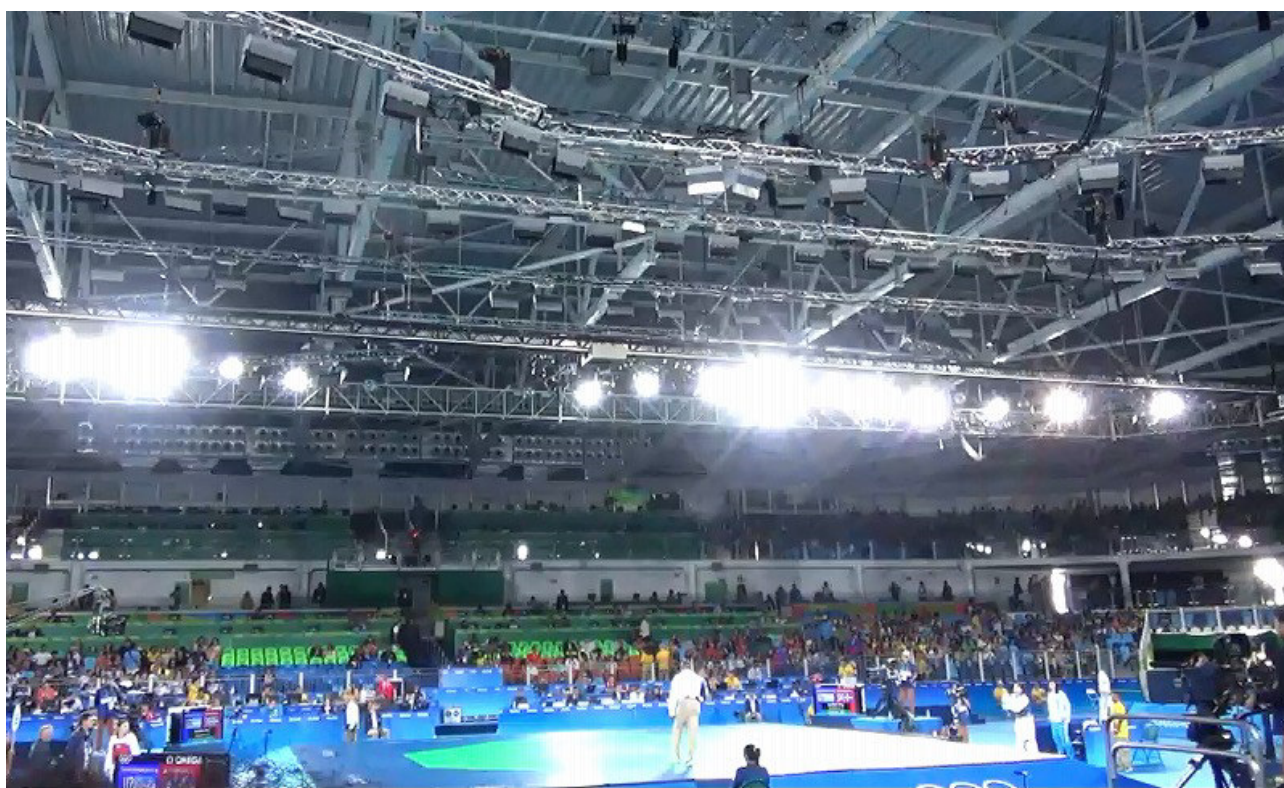
テコンドー会場に入ると、まず、仮施設ならではの振動を味わう事になりました。お客さんの大半を占めるブラジル人達がサンバの如く、あちらこちらで大騒ぎです。ウェーブも始まるや何やらで、仮設スタンドが揺れてそれはそれで盛り上がりましたが、建築基準が厳しい日本では、いろいろと課題もあるのかな、そんなことも感じました。



熱気あふれるテコンドーの競技会場

さて、私は、かつて、韓国・龍仁大学でテコンドーの国際大会を見たことがありましたが、オリンピックの国際感は予想を遥かに超えていました。日本では、空手がメインでテコンドーはマイナー競技の一つですが、会場では、アジア人だけでなくヨーロッパや南米の選手が活躍しているのです。同行した都議も私が龍仁大学道場で最初に感じたカルチャーショックを感じたようでした。

会場の客席を埋め盛り上げていたのは現地・ブラジル人でした。となると、4年後には東京中あるいは日本中の人々が全ての会場を埋めて大会を盛り上げなくてはなりません。



テコンドー競技会場

そこで気になるのは、4年後の東京大会でしっかりとこの役目を東京が担えるのかという点です。そして、オリンピック競技の中には、地上波放送の機会が少なく認知度が低い競技もあります。

今後、このような点も踏まえながら、2020年に向けて頑張っていかなければならないとオリンピック・パラリンピック準備局に改めて提言しました。

さて、この日の夜ですが、陸上競技場エスタジオ・オリンピック・ジョアン・アベランジェに向かいました。ここでのポイントは主に2つです。一つは、多くの人々の安全な導線や警備状況、二つ目は、競技会場の照明です。

まず、前者については最寄り駅とスタジアム間には行きも帰りも理想的に人が流れていたと思います。一方で、道路幅員が狭い日本の現状に思いを馳せ、東京大会ではよりきめ細かな対策が必要になると感じました。



会場までの誘導路

ボランティアの方々も沢山いらっしゃるのですが、一人一人の役割分担が明確で、それぞれのゲートへ一生懸命にそして円滑に誘導されていました。そして、国民性もあるとは思いますが、皆さまが明るく開放的にそれぞれの個性を活かして積極的に話しかけながら活動されていました。東京マラソンのボランティアの方々からも感じる事ですが、本当に一つのチームが形成されて気持ちの良い瞬間でした。

今後、どちらかと言えば控えめと言われる日本の国民性を踏まえ
ると、ボランティアリーダーの養成など、東京オリンピックで活発
なボランティア活動が展開されるよう、準備をしっかりとしておくこ
とも必要であると痛感しました。

さて後者です。スタジアム内の照明は国際映像に支障のない明る
さを求められますが、一方でむやみやたらに明るくすると、周辺地
域への影響も大きくなってしまいます。そこで、光を漏らさず中を
明るく照らす事が重要になってきます。

実際、リオ大会の陸上競技会場内はまるで昼間のように明るく、
競技場の外との照明の差に感心すると同時に、これがオリンピック
の照明かと、実感しました。



陸上競技会場



400メートルリレーで
銀メダルを獲得した
日本チームの4人です。
目の前で見て、興奮し、
その快挙に感動しました。

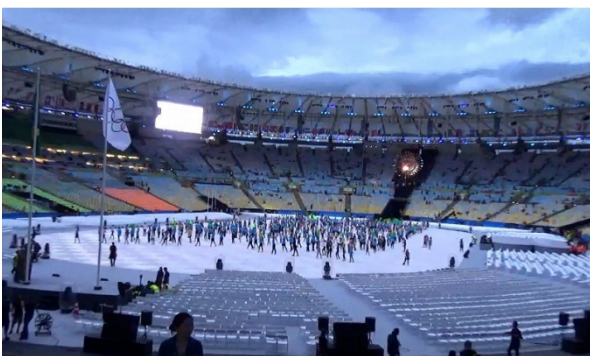
過日、2019年のラグビーワールドカップを運営するワールドラグビーリミテッドのアラン・ギルピン統括責任者が調布の東京スタジアムを訪れた際に立ち話で話したのですが、「とにかく照明だけはちゃんとして欲しい。」という要望がありました。

その中で、東京スタジアムは2020年オリンピックの会場でもあるのだから、19年のラグビー大会の時点で20年のオリンピック基準で準備しておいた方が良く、との助言も頂きました。

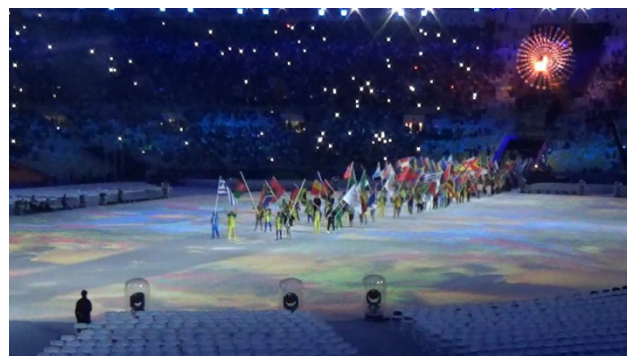
さて、今回のメインである閉会式ですが会場はエスタジオ・ド・マラカナンという競技場です。サッカーファンにとっては1950年ワールドカップでブラジルが決勝戦で敗れ「マナカランの悲劇」と呼ばれた地として有名です。また、私のような格闘技ファンの間では伝説の柔道家・木村政彦がエリオ・グレーシーを破った事に由来する「マナカランの屈辱」が有名です。

余談はさておき、これまで様々なドラマが生まれきたマナカランに日本を代表するアニメが流れ、安倍総理がマリオに扮して、地球の裏側の日本から土管を通ってきたインパクトは絶大でした。

実は、リオ市から東京都へ五輪旗が引き継がれるハンドオーバーセレモニーの演出を手がけた佐々木宏さんと菅野薫さんのお二人とは陸上競技場でお会いしていました。その時、「期待して待っていて下さい。」と言われていたのでワクワクしながら迎えた閉会式でありました。



閉会式の準備風景



閉会式 選手入場



閉会式の様子



五輪旗を受け取る小池東京都知事

無事に小池百合子都知事に五輪旗が手渡された姿も何度も日本のニュースで流れたと帰国後に聞きました。あいにくの雨だったのが残念ですが、小池知事の着物姿には会場から大絶賛の声が飛んでいました。今までも都庁の部局には和装は世界でウケが良いから世界の舞台では考えた方が良いと言い続けてきましたが、和装は、今後も一つのポイントだと思います。

さて、リオの閉会式のセレモニー内容は皆さんご覧の通りですが、東京大会では東京らしさをどう出していくのか？これから皆で考えなくてはなりません。そして今度は2024年に繋いでいく使命を帯びています。



閉会式終了後の都知事記者会見の様子

東京は、現在は会場整備も終了していない段階ですが、あの興奮を次の4年間へと引き渡す事まで考えると、東京オリンピック・パラリンピックへは次から次へと乗り越えていくものがあると、改めて身を引き締めたところです。

そして、現地を視察した今、私が強く思うのは、20年大会では多くの青少年にオリンピックに触れて欲しいという事です。閉会式で世界の人が集まる姿に、もの凄いパワーを感じました。もし、自分が小学生とか小さい頃にあの空気に接していたらスポーツ選手としてだけでなく、国際的マインドが醸成されていたのかなと感じました。英語をもっと話せるように真面目に勉強したかもしれない、それぞれの国について地域性や文化を学び自分の生き方に反映させたかもしれない、そんなことも思いました。

今回の視察では、次期開催地の日本人ということで、多くの人に話しかけられ様々な方とお話が出来ました。オーストラリア、アルゼンチン、ニュージーランド、コロンビア、カナダなど閉会式に集まった世界中の人達と充実した意見交換が出来ました。そして、2022年の北京冬季大会組織委員会の方とも言葉を交わすこともできました。

南米初のオリンピックの熱気、ボランティアの方々の活躍、夜間開催に備えた競技場の照明設備、閉会式セレモニーの興奮、世界の方々との交流などから、多くの刺激を受けると同時に、2020年のオリンピックに向けて解決すべきいくつかの課題に思いを馳せ、決意を新たにしました。